

『定着者と部外者』におけるノルベルト・エリアスの理論的革新性

大 平 章

Norbert Elias's Theoretical Innovation in *The Established and the Outsiders*

OHIRA Akira

Abstract

Norbert Elias published *The Established and the Outsiders* in collaboration with John L. Scotson in 1965. It was not until 1978 and in 1983 that his best-known books of historical sociology, *The Civilizing Process* and *The Court Society* became available to readers in English speaking countries. So *The Established and the Outsiders* was virtually his first sociological text written in English in book form. In this book Elias treated present-day social problems in an English town, where two working-class neighbourhoods continued their mutual antagonistic relations over a fairly long time; one neighbourhood called "the village" (Zone 2) claimed higher social status as an established group in terms of its oldness by keeping close relations with another middle-class area (Zone 1), and the other called "the Estate" (Zone 3) grudgingly and willy-nilly accepted its inferior status as an outside group of newcomers. Through this local community study, Elias successfully showed his sociologically fruitful findings and conceptualized them as "group charisma" and its counterpart, "group disgrace" on the basis of Max Weber's concept "clan charisma."

The established-outsider relations formed by the residents who belonged to the two different zones also enabled Elias to discover his innovative sociological theory that the macrocosm of large-scale societies is to be structurally analyzed by throwing light on the microcosm of a small community vice versa. Thus Elias demonstrated that established-outsider relations could be applied to other common social phenomena causing divisions, discrimination, and struggles between different races, nations, classes and even between the sexes, and that established people could exclude outsiders by means of stigmatization and vilification, or by monopolizing gossip networks. My paper aims to place greater emphasis upon these key elements of Elias's figurational sociology as well as other historical events in his turbulent life that led to his theoretical innovations.

(1) 現代における定着者-部外者関係

社会学者ノルベルト・エリアス (Norbert Elias 1897-1990) が『定着者と部外者』(*The Established and the Outsiders*, 1965) の中で分析した共同体の対立と緊張の構造、およびそこから彼が引き出した定着者-部外者関係のモデルは、二十世紀の後半から今日に至るまでよりいっそう激しく流動し、複雑に変化している人間社会の権力関係を知る上で依然として有効であろう。

ここ数十年の間にわれわれはこうした権力配分に関連する構造上の大きな変化を国内でも国外でも数多く経験してきた。たとえば、国内における金融組織や公共団体

や教育機関の急速な統合や再編はたいていわれわれの予想を越えた方向に向かっている。国際的な状況では、もはや軍事上の力関係は対立する政治イデオロギーが惹起する冷戦構造ではなく、巨大な産業資本と軍事力に支えられ、グローバルな経済活動を理想とする国家と、それに対抗するためにテロリズムを正当化する原理主義的な宗教集団との対立関係に移行しつつある。その場合、優れた科学的知識やテクノロジーに恵まれ、民主主義的な政治機構を備えた支配的な国家は、魔術・神話的な幻想に取りつかれた独裁国家を「悪の枢軸」、「ならず者国家」として、つまり、ある種の部外者として排除する傾向がある。換言すれば、定着者として君臨している、高

度に産業化された現代の支配的な超大国は、かつて優位を占めた宗派や民族がその宗教的、文化的価値を正当化するために他の宗派や民族を「悪魔」に仕立てたように、自らの政治的、文化的価値基準から外れる国家や集団を、狂信的なファシスト、すなわち、部外者として排除しがちである。こうした対立関係は、解決の見込みのない泥沼状態に、また、エリアスの言葉を借りれば、果てしない二重拘束の状態に陥るのかもしれない。あるいはまた、それはベルリンの壁が崩壊したように、突如としてだれも予想もしない形で消え去ることもありえよう。⁽¹⁾

定着者-部外者関係におけるこうした変化は、政治経済的なレベルだけでなく、スポーツやジェンダー関係のレベルでも見られる。たとえば、プロサッカーにおけるイングランドのプレミアリーグ、プロ野球におけるアメリカのメジャーリーグのような国際的なプロスポーツ組織は、競争に打ち勝つために必然的に優秀な選手を高額な年俵で世界各国から集めることになる。そうすると、かつて国内で人気があった当該プロスポーツが、選手の国外流出によって衰退し、国内における定着者としての地位を失うこともありえよう。次にそれがアマチュア・スポーツに与える影響も無視できないかもしれない。こうして、スポーツの相互依存の連鎖が国際的な規模で拡大することによって、勝者（定着者）と敗者（部外者）の位置関係は微妙に変化することになる。したがって、スポーツ全体が将来どのように変化するか予想することはもっと困難になる。

こうした状況はジェンダー関係についても言えよう。戦士社会の名残から男性に比べて、肉体的に劣った性として部外者的な立場に縛られていた女性の地位は、産業化や工業化による労働形態の変化によって向上し、女性は少なくとも現在のいわゆる先進国では男性と平等に近い権力機会に接近している。また、各種の国際的なスポーツへの女性の参加には目を見張るものがあり、身体能力の格差を理由にかつては男性に独占されていたラグビーやサッカーのようなスポーツ種目への積極的な女性の参加はその一例である。伝統的な道徳や宗教の圧力によって、女性選手が観衆の前で肌を露出することを禁じられていた時代はもはや過ぎ去り—イスラム教の世界では今なおそうした偏見が支配しているが、一般論として女性のスポーツへの興味や参加は徐々に高まっているようである⁽²⁾—スポーツにおける女性の部外者的なイメージは、現代の社会的価値観の中心が労働から余暇活

動・健康へと推移するにつれてほぼ払拭されたと言ってもよからう。

こうした男女間の権力バランスの変化が現代社会固有の現象ではなく、古代ローマの社会にもありえたことを指摘した社会学者はエリアスであった。エリアスは「古代ローマにおける両性間の変化する権力バランス」(The Changing Balance of Power between the Sexes in Ancient Rome)と題された論文で、初期共和制のローマでは女性は名前も与えられず、家畜に等しい財産として扱われたが、帝政期の全盛時代には一部の上流階級とはいえ、結婚や財産相続において男性とほぼ平等であったという見解を披瀝している。⁽³⁾しかし、西洋社会に特有であるこうした両性の平等の背後には、数多くの不平等が、換言すれば定着者と部外者の厳しい格差が、とりわけアジアの歴史には存在していたという前提が示唆されている。実際、エリアスはこの論文の本題に入る前に、西洋の若い男女が人前で抱き合ったり、あるいは西洋のある身分の高い女性が「レディー」と呼ばれて男性から敬意を表されたりするのに、なぜインドの主婦は通りで夫の後を歩かされるのか、なぜヒンドゥー教の僧侶の寡婦は死んだ夫とともに焼かれなければならなかったのかと問いかける。つまり、そこで彼が指摘しようとしたのは、ほぼ同時に進行した人類の生物学的進化とは別個に、人間集団はそれぞれ違った歴史を形成し、その文明化の度合いも一様ではなく、個々の民族や国家によって異なるという認識、つまり、中世から近代にかけて進行した文明化の過程の中で国家による暴力や徴税の独占が比較的早くなされたのは少なくとも西洋の一部の社会であったという前提である。敷衍すれば、人間社会の多くの例では、ある集団の他の集団に対する支配関係は優位性と劣等性という形で長く固定化されるが、宮廷社会や絶対王制を打倒し、市民革命を通じて「機能的民主化」(functional democratization)を実現した西洋社会では両者の平等性はより進行し、その権力格差はより減少したということに他ならない。とはいえ、定着者と部外者の関係は常に歴史の新たなはずみによって、たとえば急速な技術革新、大規模な革命や戦争や国家的分裂によって変化する可能性もある。ほとんどの場合、多数派が少数派を支配するが、一部の官僚エリートやテクノクラートおよび独裁的な政治家集団や宗教組織が逆に大勢の人間を支配することもありうる。エリアスが定着者-部外者関係の理論を通じて追求しているのは、現代特有のこうした権力構造の分析のみならず、古今東西の人間社会を

支配しているあらゆる差別構造の力学の解明でもある。それを実現するのは、経済的な諸関係、とりわけ生産手段を独占する集団が生産手段を持たない集団を一方向的に搾取するというマルクス主義的な唯物史観とは違う、エリ阿斯独自の「形態社会学」(figurational sociology)の方法である。

(2) 「集団的カリスマ」と「集団的汚名」

『定着者と部外者』におけるエリアスの発見は、彼自身が対立する二つの社会集団や階層を「集団的カリスマ」(group charisma)と「集団的汚名」(group disgrace)という相補的な概念によって位置づけたことである。現代社会では定着者と部外者の関係はかつてほど固定的ではなく、さまざまな外的要因によって、あるいは複数の集団の出現によってまるでスポーツのリーグ戦やカード・ゲームにも似た複雑な様相を呈し、その相対配置(configuration)の理解も容易ではない。⁽⁴⁾しかし、共同体の構造を歴史的な視野から眺め、その特徴を長期的な過程の中で捉える方法は、それによって問題が全面的に解決されることはないにしても、少なくとも問題の発生原因の理解を促してくれる。一見すると、イングランドのこうした共同体の事例研究は、イングランド固有の歴史的な階級問題、およびそれが共同体の住民にもたらす精神的影響の度合いをわれわれに認識させているようである。つまり、なぜある地区の人々は別の地区の、「古い」住民から差別的な待遇を受け、それに甘んじているのか、差別される家族の子供たちはなぜ非行に走りがちなのという問題をわれわれに問いかけ、その原因を統計学的根拠から明らかにしているようである。このような問題はとりわけ産業革命以降、多くの社会改良家や博愛主義者が取り組んだ問題であり、経済的格差やそれともなう家庭環境の悪化をどう解決するかということに収斂されがちであった。ところが、エリアスの分析ではそうした経済的な要因は第二義的である。それはそれぞれの共同体で生活する人々の職業や収入の違いを比較し、その構造的な特徴を知る上で重要ではあるが、なぜ古い共同体の人間が「われわれ集団」(we-group)として優越感に浸り、新しい共同体の人間が「彼ら集団」(they-group)として劣等性の汚名を着せられ、その畏から逃れられないのかという疑問の直接の答えにはならない。ここではエリアスの「集団的カリスマ」という社会学的概念がその鍵を握っている。

エリ阿斯はハイデルベルク大学で直接指導を仰いだアルフレート・ウェーバー教授はもとより、その兄である有名なドイツの社会学者マックス・ウェーバーからも自らの社会学的概念を発展させる際に大きな影響を受けた。エリアスの大著『文明化の過程』(*Über den Prozeß der Zivilisation*, 1939)の第二巻「国家形成と文明化」で重要なキーワードとして使用される中央政府の権威の重要性、国家による物理的暴力および徴税の独占などにはマックス・ウェーバーの影響が色濃く反映されている。エリ阿斯は、ウェーバー生誕百年を記念して一九六四年にハイデルベルクで開かれたドイツ社会学会に参加し、定着者-部外者関係の理論に関連する発表を行った。その際、彼はインドのカースト制の中に見られる、エリート僧侶から成る支配的カリスマ集団、最下層民から成る部外者集団に着目したウェーバーの研究は意義深いものであり、それが古代インドだけでなく、複雑かつ多様な形となって多くの社会でも見られることを示唆している。そして、彼は「集団カリスマ」から神秘的・超人間的要素を取り除き、ウェーバーが詳しく分析しなかった「集団的汚名」を前者の双子概念として対置することによって、ある程度、普遍的に適用される理論、つまり、より厳密な定着者-部外者関係の理論が得られることを力説している。⁽⁵⁾

実際、二十世紀の歴史においても支配的集団と被支配的集団の対立・抗争は世界中で頻繁に起こってきた。とりわけナショナリズムと愛国主義という脈絡では自己集団を優れた民族、国家として称揚し、他集団を経済、科学、文化、道徳などのあらゆる点で劣った民族、国家として蔑視する形で表面化した。国家間での領土、領海をめぐる紛争は今でも後を絶たない。民族差別、人種差別も同一国内で複数の言語が話され、肌の色が違う多様な民族がそこに住めば、よりいっそう激しくなる傾向がある。それは産業革命以降、ヨーロッパの主要な国家では階級対立という形で根強く残った。国際的なスポーツ大会では民族主義をめぐる暴力がたびたび噴出した。これらの集団的対立はある時は緩やかに、またある時は熾烈に展開されるが、戦いそのものが緊張感を失い、しだいに消滅することもある。つまり、それまで絶対的な優位を保っていた定着者集団の機能が停止し、部外者集団が相互依存の連鎖を通じて前者の権力資源の一部を吸収するのである。

エリアスの基本的な関心はこうした社会現象をいかに厳密で統一された社会学的概念によって普遍化できるか

ということであり、換言すれば、「集団的カリスマ」、「集団的汚名」の諸要素をとまなう定着者－部外者関係の理論をウェーバーの言う「理想的タイプ」(ideal type)にすることであった。それは共時的であると同時に通時的な社会分析のモデルであり、したがって現代社会に特有の政治経済的な権力資源をめぐる集団間闘争だけでなく、インドのカースト制、日本の部落差別、南アフリカのアパルトヘイト、アメリカにおける黒人と白人の間の人種差別をも含む。エリアスの功績は、この総体的法則を、イングランド中部の産業町—『定着者と部外者』ではウィンストン・パーヴァ(Winston Parva)という名称を与えられている—で展開される二つの労働者階級の対立という小世界を支配する法則から引き出したことである。その対立を決定するものは、経済的諸原因ではなく、定着者集団が自らの優位性を保持するために必要とするコミュニケーションのネットワーク(ゴシップのネットワーク)の独占であり、部外者集団を汚名化する共同幻想的作用(たとえば、差別の構造をあたかも超自然的な力による宿命や天罰でもあるかのごとく恒久化することなど)である。世界中で起こってきた、またこれからも起こりうるこのような集団間の対立に関する普遍的な法則を定着者－部外者関係の理論として提示できることを、エリアスは一九七七年に出版された『定着者と部外者』のオランダ語版の序文(一九九四年英訳)で次のように力説している。

これは、他の相互に依存する集団に対して、権力配分の点で確実に優越している集団の正常な自己像である。その集団が、農奴に対する封建領主であれ、「黒人」に対する「白人」であれ、ユダヤ教徒に対するキリスト教徒であれ、カトリック教徒に対する清教徒(またその逆)であれ、女性に対する男性(昔の時代の)であれ、小さくて比較的力のない他の国民国家に対する大きくて力のある国民国家であれ、あるいはウィンストン・パーヴァの例で言えば、近隣の新しい労働者階級居住地の成員に対する労働者階級の古い定着者集団といった社会集団であれ、これらいずれの場合でも、より強力な集団は自分たち自身を「優れた」人々と見なす。また、そうした集団は自分たちにはある種の集団的カリスマが授けられているとか、自己集団全員が他の集団が持たない特別な美德を共有していると考え。その上また、これらいずれの場合でも「優越している」人々は、より劣っている人々に、自分たちには美德がない—自分たちは人間として劣っている—と感じさせるのかもしれない。⁽⁶⁾

小さな共同体の範囲内で普遍的な形態の側面を研究することはその研究にいくつか明確な限界を課することになる。しかし、それには利点もある…(中略)…普遍的だと思われる形態の小規模な説明上のモデル—検証され、拡大され、さら

に必要であれば関連する形態への研究によって大規模に修正されようとしているモデル—を築き上げることができるのである。そういう意味では、ウィンストン・パーヴァのような小さな共同体の研究に起因する定着者－部外者形態のモデルは「経験的パラダイム」になりうる。それを、尺度として他のより複雑なこの種の形態に応用することによって、それらに共通している構造上の特徴、違った条件の下でそれらが違った方向で機能し、発展する理由をよりよく理解できるのである。⁽⁷⁾

これらの特徴のいくつかがウィンストン・パーヴァの状況のような小さな状況でも観察できた。小さな共同体である小宇宙に大規模な社会である大宇宙を、あるいはその逆のかたちで解明させることは有益である。それが、小さな状況を定着者－部外者関係の経験的パラダイムとして使うことの背後にある思考方向である。というのは、そうした関係が他の場所と違った規模でしばしば存在しているからである。⁽⁸⁾

定着者－部外者関係の理論が社会構造の分析において果たす大きな役割については本書の結論でも繰り返し強調されているが、それは多くの点で、『文明化の過程』や『宮廷社会』(Die höfische Gesellschaft, 1969)を通じてエリアスが作り上げた独自の社会学概念を継承し、さらに発展させるものであった。『定着者と部外者』の初版が出た一九六五年には上記二作の英訳はまだ出版されておらず、本書は英語圏におけるエリアスの実質的な最初の仕事であった。ちなみに英語版の『文明化の過程』(The Civilizing Process)と『宮廷社会』(The Court Society)が出たのはそれぞれ一九七八年、一九八三年である。それまでに発表されたエリアスの英語の論文は、「海軍職の発生の研究」(Studies in the Genesis of the Naval Profession, 1950)、「参加と距離化の問題」(Problems of Involvement and Detachment, 1956)、「伝統主義からの決別」(The Break with Traditionalism, 1964)、「職業」(Professions, 1964)の四作であり、それだけでは社会学者として英語圏で名を成すには無理であった。そういう意味でも、最後の亡命先であるイングランドの町を社会学の分析の対象とし、そこから自分固有の総合的理論を抽出し、英米の社会学者にインパクトを与えることはエリアスにとって重要であった。エリアスのそうした態度は本書の結論部でも反映されている。ここではエリアスは自分の社会学の方法にかなり意識的であり、すでに『文明化の過程』や『宮廷社会』で提示した、人間集団がさまざまな形で関係し合う「編み合わせ関係」(Verflechtungszusammenhängen)、長期に及ぶ人間集団の「相互依存」(Interdependenz)の連鎖を基調とする形態(図柄=関係構造)社会学を他の社会学の流派に対置し

ながらその理論的有効性を示唆している。

そこでエリ阿斯が議論の中心課題としているのはこれまで多くの社会学者、社会学者、社会理論家を悩ませてきた「個人」と「社会」の問題であり、個人が先か社会が先かというこの「ニワトリと卵」の関係から、あるいは「物質」と「精神」を切り離す伝統的な西洋の二分法的な思考方法から逃れることであった。端的に言えば、エリ阿斯は自由な個人の行為が社会を形成するというタルコット・パーソンズの機能主義、個人が社会の物質的な法則に支配されるというマルクス主義的な立場を超えようとしたのである。⁽⁹⁾ さらに別の言い方をすれば、個々の人間を寄せ集めても社会は成り立たないし、社会が辞書的な意味で言葉として存在しても、人間から離れた抽象的なものとして存在しているのではないということ、つまり「諸個人による諸社会」、もしくは「人間-社会」という概念にエリ阿斯は到達したのである。そして、それは共時的にも通時的にも独自の力学を持つのである。それゆえ、定着者集団の優越感や部外者集団の劣等感も個人と集団の同時現象であり、個人の自由な意志や行為ではどうにもならないのである。つまり、個人がいくら自分は劣等者でないと主張しても定着者集団が部外者集団に浴びせる非難と中傷の言葉から、換言すればゴシップのネットワークから個人は逃れられないのである。

さらに、エリ阿斯はエミール・デュルケムの「無規範」(anomie) という概念の評価的な意味づけに対しても疑問を投げかけている。つまり「無規範」と「規範」、 「無秩序」と「秩序」という反対概念の対置から、高度に産業化された社会を「無規範」として、過去の社会をユートピア的に「規範化」することが、現代の社会学者の陥りやすい思考であると論じている。⁽¹⁰⁾ たとえば、中世の人々は現代人よりも信仰心が厚かったとか、金銭的報酬など求めず自由にスポーツを楽しんでいたという評価的な理想主義はあまり信憑性がないということである。逆に現代人よりも感情の起伏の激しい中世の人々が、信仰の上で敬虔であるとはいえ、いかに教会の中で騒がしく、お行儀が悪かったか、あるいは彼らのスポーツがいかに暴力的で、残酷であったかという事実を認識することも重要である。⁽¹⁰⁾

同じ脈絡では『文明化の過程』の上巻でエリ阿斯が分析したマナーの歴史的発展過程も参考になる。つまり、現代人にとって無作法と思われるような食事のマナーや生理的行為が昔の人によって恥じらいもなく実践されて

いたこと、エラスムスが『少年礼儀作法論』の中で上流階級の青少年のために文明化された模範的なマナーを示したこと、あるいはそれすらもいわゆる今日の文明化された行為の一過程にしかすぎなかったことなどがエリ阿斯にとって文明化された社会の構造、およびその変化を分析する手がかりになった。換言すれば、エリ阿斯は西洋のマナーがルネッサンスから宮廷社会を経て国民国家の成立に至るまでの長期的な過程の中で段階的に発展したことを発見したのである。さらにエリ阿斯は、内的強制(人間の自己抑制)と外的強制(外部世界の圧力)によるマナーの発展過程が、国家形成の過程に呼応することを指摘した。

とはいえ、西洋の文明化された社会は最終的な到達点や理想ではなく、それは単なる過程であって、永続する保証はないということもエリアスの重要な指摘であった。これは偶然のはずみで「非文明化の過程」へと向かうこともありうる現代の文明化された社会固有の問題であり、たとえば、資源の枯渇や環境破壊が引き起こす先進工業国の危機とも関連している。世界的な規模で展開されている資源保護・環境保全の運動を契機として、高度な産業力やテクノロジーを持つ国家が批判され、「定着者」としての地位を失って「部外者」に転落する可能性もなくはない。あるいは、人間の自己抑制によって守られていた文明社会の固い鎧が国際的なテロリズムによって、またスポーツの勝敗をめぐるトラブルによって突然こわれ、国家間の暴力による非文明の状況を生み出すこともあろう。

エリ阿斯は、自分自身の理論を構築するために、他の社会学者の立場を批判することもあったが、コント、デュルケム、ウェーバー、マルクスなどの古典的な社会学(社会科学)者にはいつも敬意を表し、彼らが残した重要な「産湯」を捨てないように警告していた。⁽¹²⁾ 『文明化の過程』や『宮廷社会』に見られるように、エリ阿斯は従来、巨視的な立場から歴史社会学的な対象を主に論じていたが、『定着者と部外者』では、彼は一見、現代社会の構造分析という今日的なテーマに優先権を与えたように思われる。しかし、社会構造の分析は理論的統合への一段階であり、彼の究極の目的は、微視的な立場で現状を統計学的に分析した後に、それを土台にして組み立てられた小宇宙の法則から、小宇宙を越える大宇宙の法則に接近すること、あるいは両者の相補性を追求することであった。『定着者と部外者』におけるエリアスの理論的革新性は、彼が定着者-部外者関係のモデルを

そのような方向で、しかも異なった民族や種族の対立ではなく、イングランドの同じ労働者階級同士の対立の中に明示したことにあり、それは古典的な社会学者から彼が受け継いだ遺産の創造的な発展であったと言える。

(3) ウィンストン・パーヴァの構造分析

『定着者と部外者』で社会学的分析の対象となる小宇宙はウィンストン・パーヴァというごくありふれたイングランド中部の産業町である(町の名前も登場人物もすべて架空)。この町は一八八〇年代にチャールズ・ウィルソンというある産業家によって作られ、最も古い住人は八十年間もそこに定住しているという設定になっている。町には工場、学校、教会、店、クラブなどがあり、そこは三つの近隣地帯に分かれていた。そして、それぞれの近隣地帯では住民は、自分たちは異なった部類に属すると思っていた。ウィンストン・パーヴァの第一区域はいわゆる中産階級の居住区であり、その住民もそうした観念を抱いていた。第二区域と第三区域は労働者階級の居住区であり、第二区域には地元の工場などが多く建てられていた。二つの区域の労働者階級は職種や収入の点ではさほど違いはなかった。一般論では、社会階級として同じランクに属する二つの区域の住民には共通性や親近感があり、むしろ両者は第一区域の住民と対立関係にあるはずであった。ところが、第一区域の中産階級と第二区域の労働者階級は、自分たちを社会階級の点で第三区域の労働者階級よりも優れていると見なし、二つの労働者階級の間大きな社会的な壁ができたのである。そして、第三区域の労働階級は悔しい思いをしながらも、またあるいは不承不承、第二区域の労働者階級から浴びせられる社会的地位の劣等性という「集団的汚名」を受け入れざるをえなくなったのである。社会階級の点で両者の間に雲泥の差があったり、人種や民族の点で異なったりすればまだしも、どうして同じ労働者階級の間、第一区域の中産階級と第二区域の労働者階級が価値観を共有することによって、隔絶が生じたのか、あるいは排除の論理が作用したのか。その原因を社会学的に探求し、より納得できる理論として提示することが『定着者と部外者』におけるエリアスの目的であった。

一般的に仮定される簡単な答えは、第二区域が第三区域よりも「古い」ということであった。つまり、その住人のほとんどは、かなり長い間住んでいる家族同士のような間柄であり、古い住人としてそこに定着してい

て、ある種の帰属意識を抱いていることであった。それに比べて、第三区域の住人のほとんどはウィンストン・パーヴァに長く住んでいない新来者であり、前者との関係では「部外者」的な存在であった。つまり、彼らは急速な都市化、産業化が原因で職を求めて新興の団地に移り住んだ人々であった。それでは、両者間の社会的な壁がなぜかくも長く崩れなかったのか、なぜ排除のメカニズムが効果的に機能したのか。エリアスはそのわけを実証的な調査を通じて説明する。

第一区域の特徴は職業では会社の理事や経営者、医者や歯医者、事業主や学校の教師などが多くを占め、住居の点でも半分離家屋ということで文字通り中産階級的であった。第一区域の住人のうち何人かの仲間がウィンストン・パーヴァと密接な関係を持ち、共同体の生活で積極的な役割を果たした。その中で最も突出した人物は、この土地に父親の代から住んでいるドゥルーという州議会議員で、彼は建築請負業でも成功していた。さらに彼は地元の都市地区議会のメンバー、地元の連合体の議長や理事、学務委員会委員なども兼ねていた。いわば彼はウィンストン・パーヴァの顔であり、第三区域の人々には名前は知られていなかったが、選挙を通じて第二区域の住民と結びついていた。無所属であったが、地元の保守連合がいつも彼を後押ししていた。彼の家の周辺にも何人か重要人物がいて、たとえば老人クラブのような地元の連合体の理事に任命されていた。つまり、第一区域の少数のエリートがリーダーとしてウィンストン・パーヴァ全体において、とりわけ第二区域との関係で尽力していた。そして、階級的には異なっても昔からウィンストン・パーヴァに住んでいるという共同体意識が、あるいは人間同士の密着度の強さが両者を引きつけていた。換言すれば、第二区域の労働者階級が新来者である第三区域の同階級を排除できたのは、彼らが常に第一区域と不可分の関係にあったからである。そのことはまた、彼らが自らを定着者と見なし、優れた美德や規範の保持者として権力資源を得る大きな要因になった。

第二区域の住人は職業の点ではかなりばらつきがあった。比較的、中産階級に近い職業に従事している人々が住んでいる場所もあれば、労働者階級として位置づけられる仕事をしている人々が住む場所もあった。住居は一般に労働者階級が住む棟続きのテラス・ハウスが主流であった。しかし、彼らの間ではお互いの意思の疎通は第三区域よりもはるかにうまくはかられていた。長い間この地に住んでいるということで連帯感があり、その密

着度の強さゆえに第二区域は「村」と呼ばれ、その住人は「村人たち」と呼ばれていた。これは美しい自然に囲まれた典型的なイングランドの村という意味ではなく、その住人が「家族」、「親族」としていかに強く結びつき、閉鎖的な空間を形成していたかを意味している。彼らは第一区域のリーダーによって支援される「村」のクラブや教会や連合体を舞台に友情を深め、人生の喜びや悲しみを共有できたのである。また「村人たち」の一部は経済的な成功を収めれば、第一区域に移り住むこともでき、実際、ある種の類縁関係がそこに形成されていた。

さらに第二区域には「母親中心の家族」が形成され、それが「村」の重要な社会規範になっていた。母親たちは自分の既婚の娘や義理の息子を家の近くに住ませ、夫婦が働きに出ている間に子供たちの世話をした。近隣の目が行き届いているため、第二区域の子供たちは安心して生活でき、第三区域のように子供たちが非行に走る危険はなかった。母親が困ればすぐに娘が、義理の息子が手助けに来た。庭の芝刈りや壁のペンキ塗りなどが相互扶助という形で行われた。要するに、まるで「福祉国家」のような制度が「村」の秩序を形作っていたのである。その一つは「常磐会」のような慈善団体であり、それは老人の福祉のための重要な組織として機能した。そこでは、遠足が行われたり、パーティが開かれたりして州議会議員ドゥルーからの暖かい財政援助もあった。「村人たち」がメンバーとして参加した楽団も昔から「村」の連帯の強さの象徴であった。また「村人たち」は自分たち専用のパブで仲良く酒を飲み、第三区域の労働者がたむろする別のパブは風紀が乱れているとして近寄らなかった。要するに、第二区域の人々は「村」の社会的・道徳的優位性を維持しかつ高めるために、また、追ってくる競争相手を排除し、それがもたらす脅威から逃れるためにコミュニケーションの強力なネットワークを張り巡らし、相互依存の輪を拡大したのである。こうして彼らは相手に対して自らの地位を閉ざしたのである。

その際、最も大きな武器となったのはゴシップの独占であった。「村人たち」は第三区域の団地に住む新来者に部外者という固定的なイメージを与えるために、つまり彼らが社会的に劣っており、自分たちが持っている美德や規範を彼らが欠いていることを強調するために、相手集団への「中傷化」(vilification)、と「汚名化」(stigmatization)を繰り返した。「村人たち」の次の会話にその一端が窺われる。

主婦：「あのひとたちの基準は同じじゃないのよ。」

主婦：「あのひとたちは自分の子供を管理できないのよ。」

主婦：「向こうじゃいつも喧嘩しているのよ。」

主婦：「あそこは、村とは違うみたいね。」

主婦：「彼らのモラルは低いのよ。」

主婦：「ここらあたりの人々は喧嘩なんかしないし、垣根を引張ったりしないわよ。」

退職した機械工：「やつらは難民さ。みんな大酒飲みでね。それが事実さ。」

労働者：「ロンドンのイースト・エンドから来た連中さ。昔は何も良かったことなどなかったのさ。」

店主：「スラムが一掃されたのさ。アイルランド人か、ロンドン住民なのかよく分からないけどね。」⁽¹³⁾

相手に対する根拠のない「非難のゴシップ」(blame gossip)は、次は自己集団の美德に対する「賞賛のゴシップ」(grace gossip)に転じる。ここでは戦争で夫を失い、働きながら女手一つで三人の小さな娘を育てたクラウチ夫人のエピソードがその代表的な例となる。彼女の家の壁には軍服を着た亡き夫の遺影が掛けられ、彼女は病気の娘を必死で看病し、完治させた。さらに彼女は、他の戦争未亡人を助けるために退役軍人の会に加わり、さまざまな地元の連合体にも身を捧げた。彼女はこうして「村」の最も優れた規範を守るお手本として賞賛され、ゴシップの回路が慈善委員会の活動に拍車をかけた。このようにして「非難のゴシップ」と「賞賛のゴシップ」が合体し、第二区域の住民を優れた集団として、第三区域の住民を劣った集団として固定化するメカニズムが作用したのである。「集団的カリスマ」にしる「集団的汚名」にしる、この集団の力学に否応なく個人は巻き込まれ、逃れることはできなかった。ここでは両方の労働階級には目立つほどの経済的格差がなかったという事実が再度思い起こされるべきであろう。第三区域の人々と接触しようとする第二区域の住人には厳しい監視の目が光り、掟を破った人間には優越集団からの排除という罰が待っていた。

第三区域の労働者階級が第二区域のそれと違っていた最も大きな点は、前者には後者のような集団の緊密な結びつきがなかったということ、つまり、「古さ」という後者の武器に打ち勝てる集団の密着度が前者にはなかったということである。したがって、第三区域の住民は第一区域から送られてくる権力資源の一部を受け取ることができなかったのである。その大きな理由は、第三区域の住人のほとんどがイギリスの他の場所から移り住んできたということにあった。調査によると、戦争中、軍需工場がロンドンから当地に疎開したため、かなりの「ロ

ンドン訛りの英語」を話す人々が移住してきた。また産業上の変化によってヨークシャーからも労働者の集団が流れてきた。そうした現代社会特有の社会的移動性が第三区域にいわゆる新興団地を出現させることになった。「村人たち」は新来者を暖かく迎え、「村」の伝統や習慣を彼らに教えることもできたはずである。またロンドン人の陽気さや人懐っこさを理解し、パブで仲良く酒を飲むこともできたはずである。ところが「村人たち」は新来者の出現を「侵入」、「脅威」として受け止めたのである。こうして「村人たち」はウィンストン・パーヴァの教会、礼拝堂、ユースクラブ、慈善協会で新来者を冷遇したのである。古い集団と新しい集団の確執はどここの国でも、どこの社会でも見られるが、ここでは両集団のコミュニケーションがまったく分離しているのが特徴である。ゴシップの回路は「村人」たちに独占され、新来者は彼らが示す優越感に憤慨するが、その声には諦めと絶望の響きが入り混じる。

- 主婦:「あのひとたちはまったく俗物なのよ。」
 技師(ロンドンからの疎開者):「おれたちのことなど気にもかけないし、気にかけてもありゃしないのさ。」
 技師(ロンドンからの疎開者):「本当に気取ったやつらさ。おれたちのことを理解しようとする気などありゃしないのさ。」
 労働者(ヨークシャーの出身者):「じつに高慢なやつらさ。」
 主婦:「ここらへんよりもいい階級みたい。特にあそこの教会のそばはね。」
 退役軍人:「やつらはあのちっぽけな場所を自慢しているのさ」
 靴下工場の工員:「古い連中さ。あそこを村なんて呼んで、それでおれたちを締め出すのさ。」⁽¹⁴⁾

詳しい説明を加える必要もないほど、「村人」間、新来者間の会話は、第二区域と第三区域の社会的分裂がかなり深刻であることを伝えている。人々の声の独特な響き、ジェスチャー、顔の豊かな表情(エリアスはそれを、他の動物が持たない、進化の過程で獲得された人類独自の生物学的特質と見なした)などは時として社会科学の使い古された概念よりも現実を鋭く描写することがあり、エリアスはこうした手段を重要視した社会学者でもあった。『定着者と部外者』における社会学的分析は文学的には「ウィンストン・パーヴァ物語」に置き換えられると言っても過言ではなからう。いわれない社会的差別、およびそれが人間に与える心理的影響は、十九世紀リアリズム小説の主要なテーマであり、エリアスの観察は時折そうした文学者の世界を髣髴させる。

第三区域の人々の深刻な問題は、たとえ個々の住人が真面目で勤勉な労働者であっても、第二区域の人々が浴びせる誹謗中傷に反発できず、集団全員の「汚名化」に屈してしまうことであった。調査の結果、判明したのは、経済的条件のみならず他の倫理的、道徳的基準もしくは教育への関心の点でも両者間には大きな差がないということであり、また第三区域に住む一部の「より乱暴な家族」、「最悪の少数者」に向けられた劣等性が「集団的汚名」として第三地区の全員を拘束することになったということである。同じ脈絡からすれば、「最高の少数者」のおかげで第二区域の住人は、個人的にさほど注目に値するほどの能力がなくても集団としての優秀性、つまり「集団的カリスマ」を共有することになったのである。

実際、第三区域の評判を下げていたのは、数個の家族であった。その代表として団地に住む肉体労働者のある家族が挙げられた。彼の妻はかなりの酒飲みで、パブで働いていて、さまざまな男性との性的関係が取りざたされていた。彼女の二人の息子も乱暴者で、一人は後に刑務所に送られた。家の窓ガラスはこわれ、台所は汚く、洗ってない食器類や食べ残しがテーブルに放置されていた。天井からガスの取り付け金具が飛び出し、死んだ蠅の付着した蠅取り紙がぶら下がっていた。もう一つの家族も家庭の管理という点では失格であった。その家の夫は中部地方の別の場所から当地に移ってきた男で、兵役中にイタリアの少女と結婚した。庭の芝が伸び放題で、家の手入れもほとんどされておらず、妻は家出を繰り返していたようであった。五人の子供がいて、息子たちは学業成績も素行も悪く、第三区域の不良仲間属していた。さらにこの家をめぐるスキャンダルは地元の新聞に大きく取り上げられた。長女がアイルランド人からプロポーズされ、結婚に反対したアイルランド人の家族が酔った勢いでその家に乱入し、暴力事件に発展したのである。

一部の「より乱暴な家族」のこうした悪い噂が「悪循環」となって第三区域の「汚名化」を促進し、団地に住む大部分の住民が差別されるという否定的状況を生み出したのである。かくして、「村人たち」は第三区域の住民全体に「台所が汚い、くさい」、「子供の教育がなっていない」、「親が不道徳である」という非難や中傷を浴びせ、劣等者の烙印を押し、共同幻想としての劣等性の神話を自ら創造したのである。「集団的カリスマ」と「集団的汚名」を支配するこの力学をエリアスは、対

立する集団間の普遍的な現象と見なしたのである。さらにこの差別の構造は、第三区域の若者たちによって引き継がれ、内面化され、かれらの人格構造 (Habitus) を形成する。自分たちを差別する第二区域の住人に対して若者たちは「村」の規範や価値観に挑戦する形で報復する。その代表が第三区域の不良仲間「ザ・ボーイズ」(サッカー・フーリガンやネオナチなどの類似集団) である。彼らはとりわけ地元の青少年のクラブで備品をこわしたり、猥褻な言葉を使ったり、あるいはみだらな行為に耽ったりして、ますます第三区域の評判を悪くするのである。しかし、こうした共同体の対立関係も時間の経過とともにある時には突然、またある時には徐々に消滅することもありうる。ウィンストン・パーヴァの場合には「最悪の少数者」が、家賃が値上げされたために、あるいは好条件の別の団地が他の場所にできたために移動したことで緊張状態が消えたとされている。今日のように急速に変化する産業社会であれば、共同体の周辺にさらに多くの区域が新たに出現する可能性がある。もしウィンストン・パーヴァの近くに第四区域、第五区域ができていけば、相互依存の形態や方向が微妙に変化して、第二区域は以前ほど権力を維持できなくなり、その伝統的な規範や価値観が新興区域のそれにとって代わられたかもしれない。エリアスはここでそのことに言及してはいないが、彼が『社会学とは何か』(Was ist Soziologie? 1970) で提示した「ゲームのモデル」からすれば、こうした意図されない、無計画の社会変化は今日では十分起こりうるはずである。⁽¹⁵⁾

(4) 定着者-部外者関係の理論におけるエリアスの個人的な歴史

『定着者と部外者』の序文や結論でエリアスが強調したのは、階級間・階層間・集団間の対立を人間社会の普遍的な現象として総体的に把握する方法が定着者-部外者関係をモデルにすることで得られるということであった。そして、それは実際、ウィンストン・パーヴァという小さな共同体の経験的な分析を通じて実現されたわけであるが、この社会学的に重要な発見がエリアス自身の個人的な歴史とどのように関わっていたかという問題もまた重要である。エリアスは二度の世界大戦、ワイマール共和国の成立とその挫折、ロシア革命の成功とベルリンの壁の崩壊などに象徴される二十世紀の激動波乱をすべて経験したという点でも稀有な社会学者であった。個

人的にも第一次世界大戦ではドイツ軍の通信兵として東部戦線、西部戦線の両方に赴いた。ワイマール共和国時代には左翼と右翼の間で繰り広げられた激しい暴力の応酬も目撃した。ナチスに追われてフランクフルト大学を去り、フランスを経て最終的にはイングランドに亡命するという難民生活に近い体験もした。その中でも母親がアウシュヴィッツで殺されたことはエリアスにとって最大の悲劇であった。イギリスで教職についていた頃には米ソの冷戦構造が深まり、エリアスはそこにイデオロギーの対立によって二極化する世界像を見た。

こうした体験の多くは、彼がヨーロッパの諸国において、支配的な民族集団から宗教的、文化的に異質な集団として、つまり部外者として扱われたユダヤ民族に属していたということとも関係がある。そうした個人の伝記的な側面が『定着者と部外者』を特異な研究として際立たせていることは事実であろう。しかし、ユダヤ人としての出自をそうした個人的な体験のレベルに限定せず、むしろユダヤ人が集団として、あるいは民族としてたどった歴史的過程を社会学的な観点から冷静に見つめることができたことが革新的な理論の発見につながったと言えよう。

エリアスは当時ドイツ領であったポーランドのプレスラウの裕福なユダヤ人家庭で育った。若い頃から自分がドイツ人に軽蔑されるユダヤ人という少数派の文化に属していることを自覚してはいたが、一方ではドイツ国民としての誇りも感じていた。プレスラウのユダヤ人の大部分も同じような意識を持ち、自分たちが多少差別されてはいても、反ユダヤ主義がホロコーストに至るとは夢にも思っていなかった。しかし、間もなくその悪夢がヒトラーによって現実化されたのである。エリアス自身も国家社会主義の台頭に気づき、その危険性を察知してはいたが、一時はヒトラーの演説に変装して参加する余裕もあった。文明化されているはずの社会でなぜこのような非文明的な行為がなされたのか。これは善良なドイツ市民ならだれもが自分自身に尋ねた問いであろう。エリアスはこの問いの答えを出すために、自分自身の経験に基づき、それを定着者-部外者関係の理論に具現しようと考えていたのである。その最終的な結果は彼の大著『ドイツ人論』(Studien über die Deutschen, 1989) に集約されている。しかし、そこで展開される理論や方法論の萌芽は『定着者と部外者』の中に見出される。なぜドイツ人はユダヤ人を「汚名化」したのか、なぜドイツ中産階級はフランスやイギリスの宮廷文化、貴族文化を虚飾

として排し、自らの「中産階級的な読書文化」に閉じこもったのかという問いは、なぜウィンストン・チャーチルの第二区域の住民は第三区域の住民を「劣等者」と見なしたのか、なぜ「村人たちはウィンストン・チャーチルの文化施設や慈善団体を独占したのか、換言すれば、なぜ「村人たちは自らを「文明化された人々」、新来者たちを「文明化されない人々」と見なしたのか」という問いと呼応する。ここでも注意しなければならないのは、差別される人々の劣等性を個別化しないことである。エリアスは、差別されるユダヤ人、またディアスポラの運命を背負ったユダヤ人を個人として、差別される黒人やジプシーになぞらえたのではない。エリアスは、「集団的カリスマ」とそれに対応する「集団的汚名」が人間集団のどのような相互依存の連鎖や編み合わせ関係をともなうて起こるかを、長期的な過程分析に基づいて理解する作業を優先させ、それによって、集団を支配するメカニズムが個人をも縛っていることを発見したのである。それは研究対象に積極的に関わりながら、そこから距離を置く「参加と距離化」という研究態度の所産に他ならない。

エリアスは『回想録』(Reflections on a Life, 1990)の中でこの定着者と部外者関係の理論的意味についてたびたび貴重な見解を披瀝している。たとえば、部外者が定着者にとって圧倒的に無力である場合—前者が大農園の黒人奴隷やゲットーに住む貧しいユダヤ人であるような場合—両者間の緊張度は比較的低い、部外者集団が社会的に上昇して、法的、社会的平等を求めるとき高くなり、その場合、両方の集団にとってアイデンティティのむづかしい問題が生じる。その時、定着者集団はそれまで当然視されていた自分たちの秩序が動揺するのを感じ、さらに自分たちの地位を支えていた個人的価値やプライドがすべて奪われるのではないかとこの脅威を抱く。エリアスが『回想録』で注目したのはこうした点であり、集団の権力関係を決定するそのメカニズムを彼はドイツ人とユダヤ人の対立の大きな要素、反ユダヤ主義の根源と見なしたのである。⁽¹⁶⁾ エリアスの見解によると、ドイツ帝国では、ユダヤ人の多くはブルジョア社会や貴族社会の高い地位、高級官僚、外交官、大学教授などの地位から排除されていたが、比較的的自由を与えられた商業・文化活動の領域では軽蔑された少数者集団にふさわしい行動はまったく取らず、むしろ法的平等を真面目に捉え、まるでドイツ人のように振舞っていた。二十世紀初期のドイツのユダヤ人は、文化的、経済的に抑圧

されたジプシーのような集団とはまったく違い、あるいは東欧から流れてきたユダヤ移民とも違い、文化的にドイツに同化し、経済的にも平等であった。こうしたユダヤ人の経済的地位のおかげで、あるいは知的職業を評価する彼らの意識もあって、定着者によって規定された部外者としてのイメージに彼らは反発した。⁽¹⁷⁾ つまり、エリアスは、こうしたユダヤ人の態度が、国家的な統一が遅れたドイツ市民の劣等感を刺激し、ユダヤ人を脅威と見なす反ユダヤ主義の幻想を増殖させたことを示唆しているのである。定着者—部外者関係はナチスの時代に典型的に現れたわけではなく、過去にも存在したし、今日でも起こりうる現象であるがゆえに、そのメカニズムを客観的な立場で知的に分析する必要性をエリアスは力説したのである。

定着者—部外者関係のモデル構築にエリアスが関心を寄せていた形跡が窺われるのは、彼が一九三五年に書いた「ユグノー派のフランスからの追放」(The Expulsion of the Huguenots from France)という論文である。これは社会学的な研究というよりもむしろ歴史的事実に基づく短い論評であるが、ここでもルイ十四世から追放されるユグノー派の姿が部外者のイメージに重なる。あるいはまた、それはナチス・ドイツから虐待され、放逐されるユダヤ人の惨めな姿を髣髴させるのかもしれない。十四世紀後半、「ナントの勅令」によってプロテスタントはカトリックとともに平等権を与えられたのに、なぜ国外追放の憂き目に遭ったのか。これがこの論文におけるエリアスの根本的な問いかけである。ルイ十四世はユグノー派に信仰の自由を保証したが、その後フランスで貧困が増大し、経済的不安が高まると王朝の中樞を握るカトリック勢力に押され、商業活動に従事し、官僚機構や王朝に権力資源を持たない少数派のプロテスタントに攻撃の矛先を向けた。つまり、彼らは国内に不安や脅威をもたらす悪の根源として、また悪魔として「汚名化」されスケープゴートにされたのである。かくして、ユグノー派は公職から追放され、出版の自由、職業選択の自由、結婚の自由を奪われ、彼らの教会も破壊された。さらに、竜騎兵による略奪、レイブが続き、その残虐ぶりはナチスのホロコーストを髣髴させるものであった。かつてフランスに経済的な富をもたらしたユグノー派はこうしてイギリスやオランダに移住した。しかし、逆にフランスは経済的困難に陥り、ルイ十四世も苦境に立たされることになったのである。⁽¹⁸⁾

部外者集団の存在を脅威と感じた定着者集団が、自ら

の宗教的、道徳的価値観を称揚し、かつそれを正当化するために部外者集団を迫害したり、追放したりするこうしたパターンは、古代ギリシャ時代における都市国家間の争い、宗教改革以来ヨーロッパの主要な国で起こったカトリックとプロテスタントの確執、十字軍遠征時のキリスト教徒とイスラム教徒の戦いなど、歴史上たびたび見られたことである。複数の民族を抱える現代の国民国家でもこうした問題はいわゆる人種・民族対立として噴出した。エリアスもユグノー派の迫害の例だけでなく、定着者-部外者関係に起因する多くの暴力を社会学の分析対象として、とりわけ文明化された社会で起こりうる現象として取り上げた。近年においてはナチスの大量虐殺に匹敵する残虐行為がかつて民族調和の理想的社会主義国と見なされた旧ユーゴでなされたし、アメリカを中心とした西洋諸国の物質文明や文化的価値観を否定するイスラム原理主義のテロリズムの脅威は今日でも世界中で続いている。⁽¹⁹⁾ 暴力を抑える国家の統治機能は疑問視され、エリアスの言う「非文明化の過程」の兆候にわれわれは脅えていると言っても過言ではない。エリアスは「機能的民主化」を通じて、つまり相互依存関係の拡大によって、部外者集団が定着者集団の権力資源に接近し、両者の位置関係が徐々に変化していく現実を、ヨーロッパ社会における貴族対市民階級、資本家対労働組合、男性対女性の中に見た。しかし、そうした対立関係の多くはまた暴力の発生原因でもあった。文明化された社会であれば、国家の暴力独占によって暴力は当然封じ込められなければならない。しかし、文明化がある種の継続的な過程であれば、文明化された社会が持続する絶対的な保証はない。暴力の私物化によって現代国家の統治機能が、旧社会主義国でも資本主義国でも衰えていく現実をわれわれは体験した。つまり、文明化された社会の背後に「非文明化の過程」が徐々に忍び寄っていることをわれわれは感じているのである。あるいはまた、ハンナ・アレントが警告したように、巨大な独裁国家や全体主義国家の暴力による部外者（少数民族や労働諸団体などを含む）の排除が非文明を一挙に生み出すこともあろう。⁽²⁰⁾

エリアスの定着者-部外者関係の理論とそのモデルは、現代世界の集団間の対立構造をすべて明らかにし、解決することを目指しているわけではないが、それが少なくとも経験的な参与観察をともなう長期的な視野によって構築されたという意味ではより信頼度の高いものであると言えよう。実際、前述したように、この方法

はエリアスが『文明化の過程』や『宮廷社会』で提示したいわゆる形態社会学の方法論を補強し、さらにそれを発展させたという意味でも重要である。定着者-部外者関係の概念は、エリアスが生み出した社会学の方法の中では最も応用範囲が広いものであり、政治組織、スポーツ、文化・文学団体などにおいて権力を行使する側と行使される側の変化する関係を長期的な展望で研究する場合、将来的にも発展の余地が大いにある。⁽²¹⁾ ここでも重要な対象は個人ではなく相互依存を繰り返す集団としての人間であり、諸集団の複雑な編み合わせである。定着者-部外者関係のモデルを最も有効に使ったのはエリアスの弟子の一人であり、彼とともにスポーツ社会学の分野において数々の業績を残したエリック・ダニングである。彼はそれをアメリカのプロ野球における人種関係のモデルとして応用し、白人（定着者）-黒人（部外者）関係という形で、両者の長期に及ぶ変化を豊富な経験的な資料に基づき分析している。⁽²²⁾

『定着者と部外者』に関連してもう一つ重要なことは、本書がエリアスと、当時大学院生であったJ・L・スコットソンの共同研究所産として出版されたことである。本書は元来、新来の労働者階級が住む特定の地区でなぜ青少年の非行が多いのかという問題を社会的に分析することが目的であった。もちろん普遍的な社会現象としての定着者-部外者関係の理論に方向性を与えたのはエリアスであった。しかし、いかに優れた理論であろうとも、取材訪問や統計学的な資料の作成などを含む経験的な基礎作業なしには、その正当性を証明することができないことを本書は証明している。

注

(1) 二重拘束の過程に関するエリアスの詳しい説明は、ノルベルト・エリアス著、波田節夫他訳『参加と距離化』（法政大学出版局、一九九一）一二五-一六六頁、およびノルベルト・エリアス、エリック・ダニング著、大平章訳『スポーツと文明化』（法政大学出版局、一九九五）二〇、三八、四七頁を参照。原典はそれぞれ、Norbert Elias, *Engagement und Distanzierung* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1983), pp.137-178; Norbert Elias and Eric Dunning, *Quest for Excitement: Sport and Leisure in the Civilizing Process* (Oxford: Blackwell, 1986), pp.16, 26, 34を参照。

(2) たとえば、一九二八年のアムステルダム五輪の女子陸上八〇〇メートルで二位に入り、日本人女性初のメダリストになった人見絹江は、一七歳のとき綴った日記の中で、女性が人前で脚を見せて走ることに世間の目は冷たく、「それはほんとに冷たいものだった」と書いた。『朝日新聞』（二〇〇五年六月一八日）を参照。イスラム圏の女性も人前で肌を見せることが禁止されており、女性のスポーツ参加にも

- 従来かなりの制限があった。しかし、最近では、国によって差があるとはいえ、女性が社会に進出するにつれて、また健康で美しい肉体への願望もあり、国際的なスポーツ大会への関心が女性の間で一般に高まっている。『朝日新聞』(二〇〇五年九月二八日)を参照。
- (3) Norbert Elias, "The Changing Balance of Power between the Sexes in Ancient Rome" in Stephen Mennell and Johan Goudsblom ed., *Norbert Elias: On Civilization, Power and Knowledge* (Chicago: University of Chicago Press, 1998), pp. 191-92を参照。
- (4) 多くの場合エリアスは自分の社会学の基本的な特徴を表現するために figuration (形態=関係構造=図柄) というキーワードを使っているが、『定着者と部外者』では、configuration (相対配置) という語を多用している。さまざまな人間集団が複雑に絡み合って形成される可変的構造という意味では両方とも同じ概念であろうが、こうした状況は、彼の社会学を従来の概念で定義することがかなり困難であることを物語っている。なおエリアスはドイツ語でも Figuration という言葉を使っている。これはドイツ語の Figur (図柄, 紋様) を連想させる。英語の figuration や figure もほぼドイツ語と同じ意味を含んでいる。
- (5) Norbert Elias, "Group Charisma and Group Disgrace" in Johan Goudsblom and Stephen Mennell ed., *The Norbert Elias Reader* (Oxford: Blackwell, 1998), pp. 105-12を参照。
- (6) Norbert Elias and John L. Scotson, *The Established and the Outsiders* (London: Sage, 1994), pp.xv-xvi.
- (7) Ibid., xvii.
- (8) Ibid., li.
- (9) Ibid., p. 171を参照
- (10) Ibid., pp. 162-63を参照
- (11) 『スポーツと文明化』第五章「中世と近世初期のイギリスにおける民衆のフットボール」(二五一-三〇一頁)を参照。ここでは昔の人々は感情や情緒の安定度が低く、それが、彼らの残酷な娯楽や乱暴なスポーツに反映されていることをエリアスは証明している。
- (12) ノルベルト・エリアス著、徳安彰訳『社会学とは何か』(法政大学出版局、一九九四)一八三頁を参照。原典は、Norbert Elias, *Was ist Soziologie?* (München: Juventa, 1986), pp. 157-58を参照。英語版はNorbert Elias, S. Mennell and G. Morrissey trans., *What is Sociology?* (New York: Columbia University Press), pp. 151-52を参照。大平章編著『ノルベルト・エリアスと21世紀』(成文堂、二〇〇三) xiiiも参照。
- (13) Norbert Elias and John L. Scotson, *The Established and the Outsiders*, p. 78.
- (14) Ibid., p. 80.
- (15) Norbert Elias, *Was ist Soziologie?*, pp. 75-83 (Kapitel 3 Spiel-Modelle); *What is sociology?*, pp. 71-91 (Chapter 3 Game models)を参照。『社会学とは何か』七七-八七頁(第三章「ゲーム・モデル」)も参照。ここではエリアス独自のゲームのモデルに関する理論が展開されている。集団の数が増えると集団間の関係が複雑となり、個人の力では統御できなくなる過程が、スポーツ・チームやカード・ゲームを例に挙げて詳しく論じられている。
- (16) Norbert Elias, Edmund Jephcott trans., *Reflections on a Life* (Cambridge: Polity Press, 1990), pp. 122-25を参照。なおこの本の原典は一九八七年にオランダ語 (*De geschiedenis van Norbert Elias*) で書かれている。一九九〇年にはドイツ語 (*Norbert Elias über sich selbst*) で出版された。
- (17) Ibid., p. 124.
- (18) Norbert Elias, "The Expulsion of the Huguenots from France" in *The Norbert Elias Reader*, pp.19-25を参照。
- (19) 二〇〇一年九月一日にニューヨークで起きたイスラム原理主義者による自爆テロ事件の前に、イギリスでも白人の若者とイスラム教系(パキスタン、バングラデシュ、カリブ諸国からの移民)の若者との間で暴力事件が頻発した。二〇〇一年四月、五月、六月と連続してBradford, Oldham, Bunleyなどのイギリス北部の町でこうした人種、民族をめぐる大規模な対立があった。新聞はそこにナショナル・フロントやイギリス国民党などの右翼勢力の介入も示唆している(*The Guardian*, June, 26, 2001)。二〇〇五年七月にロンドンの地下鉄やバスで同時に起きた自爆テロ事件、およびその後のテロに関連する事件でも移民のイスラム原理主義者が関与していた。
- (20) Denis Smith, *Norbert Elias and Modern Social Theory* (London: Sage, 2001), p. 64を参照。「非文明化の過程」に関連してエリアスの国家論とハンナ・アレントのそれが比較されている。
- (21) Stephen Mennell, *Norbert Elias: An Introduction* (Dublin: University College Dublin Press, 1998), pp. 115-39を参照。定着者-部外者関係について詳しく論じられている。その応用例などにも言及されている。
- (22) Eric Dunning, *Sport Matters* (London: Routledge, 1999), pp. 179-218を参照。アメリカの白人と黒人の野球における人種問題が、定着者-部外者関係の理論を使って詳しく論じられている。エリック・ダニング著、大平章訳『問題としてのスポーツ』(法政大学出版局、二〇〇四)三一八-八七頁も参照。